

J-HPH Newsletter

No.11 May, 2019

日本 HPH ネットワーク事務局
〒812-8633 福岡市博多区千代
5丁目18-1 千鳥橋病院内
TEL : 092-641-2761 (代表)
<https://hphnet.jp>



第4回 J-HPH スプリングセミナー

概要

日本HPHネットワーク（以下J-HPH）は、第4回J-HPHスプリングセミナーおよびスプリングセミナー関連企画を2019年3月9日（土）～10日（日）の2日間にわたり、順天堂大学第2教育棟国際教養学部にてワークショップと基調講演を開催しました。

ワークショップでは、当ネットワークの重要なテーマである、SDHの視点に基づいたヘルスプロモーションの実践のため、支援ツールを用いた活用法を学ぶ「日本版貧困治療ワークショップ」、既存統計資料を地域診断に活かすための実践的な分析法と社会資源の活用を学ぶ「地域分析と地域づくり」、そして、LGBTフレンドリーホスピタルとするための「明日から取り組めるLGBTの患者さんへの対応」の3つのワークショップを開催しました。

基調講演では、台湾よりDr. Shu-Ti Chiou（国立陽明大学公衆衛生研究所准教授・医学博士・前国際HPHネットワーク理事）を講師に迎え、HPHマネジメントツールを活用した、医療機関に対するヘルスプロモーション活動の第三者評価を定着させた実践と経験を学びました。また、世界各国で翻訳され、活用されている「エイジフレンドリー・ヘルスケア」に基づいた、「高齢者にやさしい病院づくり」の取り組みも紹介されました。

会場には、医師、看護師、研究者、リハセラピスト、薬剤師、栄養士、ソーシャルワーカーなど約150名の多職種の方にご参

加いただきました。また、スプリングセミナー関連企画として、3月10日（日）、「高齢者にやさしい病院ワークショップ」を開催しました。今回のセミナーの開催にあたり、ご尽力いただきました、順天堂大学国際教養学部の皆様をはじめ、ご支援ご協力をいただきました皆様方に厚く御礼申し上げます。

<目次>

第4回J-HPHスプリングセミナー	1
概要.....	1
基調講演.....	2
ワークショップ報告.....	3
WS1「日本版貧困治療ワークショップ」.....	3
WS2「地域診断と地域づくり」.....	3
WS3「明日から取り組めるLGBTの患者さんへの対応」.....	4
スプリングセミナー関連企画.....	5
国際HPHネットワークTOPICS	6
第27回国際HPHカンファレンス.....	6
加盟事業所の取り組み	6
津軽保健生活協同組合 健生病院.....	6
淀川勤労者厚生協会 西淀病院.....	7
福岡保健企画 ちどり薬局.....	8
親仁会 米の山病院.....	8
加盟事業所数・新規加盟事業所	8
日本HPHネットワークTOPICS	9
第4回J-HPHカンファレンス2019.....	9

講演

「台湾における先進的な HPH 活動と高齢者にやさしい病院づくりの経験」 ～健康と皆さんのための HPH 活用法・HPH 運動における台湾の経験～

Dr. Shu-Ti Chiou シュウティ・チョウ氏 国立陽明大学医学部准教授・台湾

陽明大学医学部准教授であり前 HPH ネットワーク理事、高齢者に優しい医療に関する HPH タスクフォースを努めるシュウティ・チョウ先生から HPH の総論と台湾における経験をお話していただいた。講演は首尾一貫してパワフル。台湾の HPH 活動がなぜ大きな前進を勝ち得たのか、その原動力となった、シュウティ・チョウ先生の躍動を感じられるものであった。講演内容は以下の通り。

HPH は医療改革の主要タスクであることを国連 SDGs、WHO の枠組みである「統合された人々中心のヘルスサービス (ICPHS)」などの概念的な事から、アメリカ、イギリスでの取り組みを紹介。

HPH は臨床現場でユニバーサルヘルスゲイン（全ての人々の健康づくり）を実現するためのツールである。HPH をなぜ 3 次医療を担う大病院で実践するのか。それは、ヘルスプロモーション・予防・コミュニケーションは医療の質の主要構成要素であること。HPH は病院の構造・組織・文化・プロセスの発展を通じ、質の向上を目指す医療変革であることなどを示していただいた。

台湾での取り組みを黎明期・組織段階期・主流派期に分けて紹介。印象的なのは常にわかりやすい目標設定、目標に至るプロセスの見える化と目標達成のための主体となる病院の組織変革、更にその主体となる参加病院の拡大を同時に且つ徹底して実践している点である。またその成果をエビデンスと

して発信し普及を図ることに旺盛にとり組む必要性を感じた。ユニークな取り組みとしては、黎明期に台北市が健康都市プロジェクトとして、2002 年に 1 年間で 10 万人の市民が参加して取り組んだ 100 トン減量運動。病院の取り組みは職員と住民に対して実施され、職員全員の体重測定と健康的な食事づくり、競争して取り組む中でのチャンピオンの表彰などが実践されていた。

また組織段階期での自己評価マニュアルの達成などの評価なども、参加病院の結果を集計し公表するなど、常に取り組みの見える化を意識していることが印象的であった。こういった取り組みの結果、過去 10 年間での台湾の健康への影響として、6 ヶ月未満児の完全母乳率ほぼ 2 倍、成人喫煙率 26.5%減、糖尿病死亡率 13%減など素晴らしい成果を上げている事も示された。

台湾では政策誘導として HPH を推進している事、報酬上のインセンティブや一部 P4P の導入などがされている点が日本での取り組みと大きく異なる点ではあるが、その取り組みの過程では、目標に拘り目標達成のために組織の構造や文化などへの介入も同時に実施しつつ、取り組みと成果の見える化をするなど、日本での取り組みにも参考になる事が多く示された。

最後のチョウ先生の言葉「ベッドと機材は医療規模を拡大できますが、医療をより素晴らしくするのは愛のみです。必要な要素は 3 つ。「愛・エビデンス・連携」が強く印象に残った。

座長・報告：伊藤真弘氏 (J-HPH 運営委員)



ワークショップ報告

WS 1「経済的評価支援ツール (試行版) ver. 1」

昨年 10 月の HPH カンファレンスに引き続き日本 HPH ネットワークが作成中の「経済的困窮評価支援ツール（試行版）」を用いたワークショップを行いました。今回は全日本民医連ソーシャルワーカー委員会に事例の準備と解説をお願いすることができました。ワークショップの目標は以下の 3 点です。

- ・経済的困窮評価支援ツール開発の概要を説明できる。
- ・提示された事例に対して経済的困窮評価支援ツールを用いた事例検討を行う。
- ・経済的困窮評価支援ツールの活かし方について参加者で意見交換を行う。

ワークショップの構成としてはレクチャーとグループワークを行いました。前半のレクチャーでは SDH（Social Determinants of Health）について鹿児島生協病院の小松真成先生より、経済的困窮評価支援ツールについて健生病院の大高由美先生よりそれぞれ分かりやすく解説を行っていただきました。

後半のグループワークでは、城北病院の SW 伍賀道子氏と高松平和病院の SW 服部啓吾氏に用意していただいた 2 つ



の事例について、各グループでツールを用いて支援策を考えるという事例検討を行いました。まずは提示した情報をもとに各グループでツールを参考にしながら支援策の検討を行い、そのあとでお二人から事例の解説をしていただきました。

今回の事例ではどちらも「世帯分離」がポイントになっていましたが、その考え方や各種制度との関連など僕自身知らないことや日ごろ意識していないことも多く大きな学びを得ることができました。

解説の中で伝えて下さった「日本の社会保障制度は複雑である」「社会保障制度は「権利」である」「地域にある相談機関を積極的に活用しよう」「人権保障の観点からも SDH を考えよう」といったメッセージも事例検討で悩んだ分だけ深く納得できたように思います。

今後も改良を重ねながらワークショップを実施し、ツールが活用方法とセットで広まることでよりよいツールの開発につながるようになっていきたいと思います。ご参加下さったみなさん、ご協力下さったみなさん、ありがとうございました。

座長：大矢亮氏（J-HPH 運営委員）

舟越光彦（J-HPH コーディネーター）

報告：大矢 亮氏（J-HPH 運営委員）

WS 2「地域診断と地域づくり」

今回のワークショップは、前回までにおこなった地域医療振興協会主催のワークショップとは異なり、主に介護分野の課題に焦点をあてた「地域診断」と「地域づくり」を考えることを目的におこなわれました。

まず、福庭 J-HPH 運営委員より、ワークショップの獲得目標として、①地域診断を学ぶ、②地域診断から得られる課題を明らかにし、地域づくりに活かす（戦略的に、効果的に進め

るために)、③地域の他機関との協力や社会資源(ソーシャルキャピタル)を考える機会とすることが提案されました。

続いて結城 J-HPH 運営委員より、ワークショップの講師として、辻大士氏(千葉大学予防医学センター特任助教)が紹介されました。

辻氏は、最初にハイリスクアプローチの限界性と地域診断の必要性、有用性について話されました。続いて日本老年学的評価研究(JAGES)の「地域マネジメント支援システム」について概要の説明があり、地域のフレイル予防や介護予防の課題分析と地域の支援対策の方法について説明されました。さらに、実際の活用例として M 市の事例をもとに説明がありました。M 市では地域診断の結果、高齢化が進んでおり、「買い物に困っている人が多い」状況が明らかとなり、住民の地域診断報告会や意見交換会などを重ね、住民による高齢者ふれあいの場として「お寄りませ」を開催したこと、また移動販売車を誘致したり、車いすの寄付や無料送迎サービスを始めたことなどが報告されました。後半では、6 グループに分かれてグループワークを行いました。実際に WEB で JAGES のホームページにアクセスして、「地域診断ツール」を用いて、グループ毎に 1 事例(1 市)の地域診断をおこない、それに基づいて地域のフレイル予防や介護予防の課題分析と地域の支援対策の検討



をおこないました。地域診断コア指標から想定される地域のイメージが実際の市の情報と照らし合わせてみて相違があるかどうか、あとで事例市を種明かしし、最後にどのような支援が必要か検討しました。

最後に、辻氏から、地域診断は、共通認識のツールであり、参加者に応じて、見せるタイミング、見せ方などの工夫が必要であること、支援に当たっては、まんべんなく考えるのではなく一定の“選択”と“集中”が重要であること、支援後も繰り返し調査を行い、再評価をしていくことが重要であること、さらに質の高いデータを集めることが必要であることが述べられました。今回用いた JAGES の「地域マネジメント支援システム」は、診断項目が実際の支援に対応していて、使いやすい一方で、登録市町村が 41 にとどまっており、今後さらに登録が進むことが期待されました。

座長：福庭勲氏・結城由恵氏(J-HPH 運営委員)

報告：福庭勲氏

WS3「明日から取り組める LGBT の患者さんへの対応」

36 名が参加し、7 名のファシリテーターによるワークショップで、あっという間の 3 時間でした。

ほとんどの参加者がこのようなワークショップへの参加は初めてで、LGBT に関する一般知識のレクチャーから始まりました。LGBT と総称される「セクシュアルマイノリティー」を理解するために、カテゴリーや基本的な語句の知識を学びました。性的指向(Sexual Orientation)と性自認(Gender Identity)の違いや、セクシュアルマイノリティーが社会や医学の中でどのようにあつかわれてきたのか、歴史や国による差などを学びました。

LGBT の人口に占める割合は、日本の調査で 8.1% (日本は LGBTQs として調査)、米国における調査で 4.6% ということで、身近にいないのではなく、見えていないという説明を受け、ファシリテーターとして参加いただいた実際の当事者の方に自らの体験を語ってもらって理解を深めました。

最初のグループワークでそれぞれの施設での医療セッティングで変える必要があることを出し合い、LGBT 特有の健康問題や、SDH としての LGBT、特に医療アクセスへの障害があることについてレクチャーを受けました。



2 回目のグループワークでは、「自施設を具体的に LGBT フレンドリーに変えていくには～医療機関としてどう配慮すべきか、それをどう実現するか」というテーマで話し合い、各グループからプロダクトの発表がありました。

最後にまとめとして「明日からできること」を、個人でできること、施設で取り組めること、パートナーシップ制度の紹介や、スタッフの感受性を高める方略などを学習しました。最後にまとめのスライドに書かれていたコメントを紹介します。

「私たちは、LGBT を通して、多様性について学び配慮することで、LGBT だけではなく様々な多様性が尊重され、みんなが生きやすい社会を作っていけると信じています。皆さんアライになって、私たちと一緒に、LGBT フレンドリーな医療機関を作って行きませんか？」誰も置き去りにしないヘルスプロモーションを考える時に忘れてはいけないテーマをいただいたと思いました。今後も J-HPH として、LGBT の患者さんへの取り組みを交流し、地域のサポートグループなどのリソースと連携できるような活動を進めていければと思います。

座長：尾形和泰氏・根岸京田氏（J-HPH 運営委員）

報告：尾形和泰氏

スプリングセミナー関連企画

3 月 10 日（日）に、前日のスプリングセミナーに続いて、関連企画「高齢者にやさしい病院ワークショップ」が順天堂大学国際教養学部で開催されました。

講師は、シュウティ・チョウ先生（国立陽明大学公衆衛生研究所准教授・前国際 HPH ネットワーク理事）で、参加者は 30 名でした。このワークショップの目的は、台湾の HPH ネットワークが開発した「高齢者に優しい病院評価マニュアル」を深く学び、日本での活用を目指すことでした。

「高齢者に優しい病院評価マニュアル」は現在 5ヶ国語に翻訳され、国際 HPH ネットワークの「高齢者にやさしい病院タスクフォース」がネットワーク内での普及もすすめているものです。このマニュアルは、2004 年に WHO が診療所を対象として作成した「高齢者にやさしい診療所」の病院版マニュアルを目指して作成されました。その原理は、WHO の「高齢者にやさしい医療の原則」の 3 つの側面および HPH 基準に基づき作成されています。その基本的価値観は、健康、思いやり、人権にあり、高齢者の健康と尊厳を守り参加を促進することを目指しています。マニュアルの構成は、病院の運営方針、コミュニケーションとサービスの提供、施設の物理的環境およびケアプロセスという 4 つの基準が設定され、HPH の自己評価基準と類似の評価構造となっていて取り組みやすいものになっています。

ワークショップは、オープニング討論（高齢者にやさしい病院における医療の質の向上とは何か？）、高齢者にやさしい病院評価マニュアルの解説、参加者による自施設の自己評価の試み、高齢者にやさしい病院とするための課題についての討論、研究と臨床の連携の 5 つのパートで構成されて運営されました。高齢者の人権擁護の理念を基盤に、高齢者の医療のプロセスを測定し、計画的に改善に取り組み医療の質を高めていく経験は日本でも取り入れていくべき実践だと感じました。参加者は、チョウ先生の情熱的な講演に大変感銘を受けていました。なお、日本 HPH ネットワークとして「高齢者に優しい病院評価マニュアル」を今年度中には翻訳出版の予定です。期待していただきたいと思います。

報告：舟越光彦氏（J-HPH 日本コーディネーター）



国際 HPH ネットワーク TOPICS

第 27 回国際 HPH カンファレンス 2019

「ヘルスケアにおける人間的な触れ合いと先端技術との調和：対話のためのデジタル化の課題と可能性」

開催日：2019年5月29日(水)～31日(金)

会場：ポーランド・ワルシャワ マリオットホテル

主催：ポーランド HPH ネットワーク

J-HPH 国際カンファレンスツアー

2019年5月27日(月)～6月2日(日)

国際 HPH カンファレンス報告は、次号に掲載します。



加盟事業所の取り組み

津軽保健生活協同組合 健生病院

当院では「地域住民のいのちと健康を守り、安心して住み続けられる街づくりに貢献する」という理念のもと、医療活動を行っています。

その日々医療活動の中、サポートセンター職員が相談支援業務で「相談に行けない」「相談しても正確に伝えられない」「どの窓口に行けばよいかわからない」などの場面に直面する機

会が多いと感じていました。一方で、経済的理由で治療に至らず亡くなった方が院内の調査で年間 5 例あったことが判明しました。これらを受けて、受診をしなくても気軽に地域で専門職がどんな相談でも、まず聞いてくれる場所があればとの想いで、「おこまりごと（無料）相談室」を開催しました。

開催場所は、買い物ついでに立ち寄るなど、多くの人アクセスしやすいよう、駅前商業施設内の市が運営する公共スペースの交流室としました。半年の期間に月 1 回、土曜日の午後計 6 回開催し、毎回、医師、看護師、薬剤師、サポートセンター職員等、複数名で対応しました。参加する医師も開催毎に、内科医・救急科医、精神科医・小児科医と変え、様々な相談に応えられるよう配慮しました。

6 回の開催で相談件数はのべ 38 件（女性 30 件、男性 8 件）、相談に来られた年代は 20 代～70 代（60～70 代が多かった）と様々でした。ご本人の病気の悩み、ご家族の病気・介護の悩み、子育ての悩み、ご近所とのトラブル、施設の入所に関する悩みなど、相談内容も様々でした。相談ひとつひとつに適切と思われる職種で、1 人に 30 分程度の時間をかけ丁寧に対応しました。

開催にあたっては、市が運営する「弘前市住民参加型まちづくり 1%システム」を活用し、運営資金面の助成を受けることが出来ました。これは市民税の 1%を財源に、市のまちづくりの取り組みを援助するシステムです。助成を受けるためには、



企画のプレゼンテーションによる採点で採否が決まりますが、その採点は最高点で市のお墨付きももらうことが出来ました。

相談件数はそれほど多くはありませんでしたが、相談者の中には継続支援につながった方や、つながりが必要と思われる方もおり、開催の目的である「地域で気軽に相談を受け、必要な支援につなげる」、「患者になれない患者を拾い上げる」ことに大いにつながっていると確信しています。

開催前に地元ラジオ出演での呼びかけ、市の広報誌情報掲載やポスター掲示、チラシの配布等を行いました。思いのほか相談件数が伸びず、周知宣伝不足が課題だと感じています。

始めたばかりでまだまだ課題は多いですが、今後も継続開催し、一人でも多くの声に耳を傾け、必要な支援につなげることで地域の健康づくりを推進していきたいと考えています。

公益財団法人 淀川勤労者厚生協会 西淀病院

2019年1月19日、大阪市西淀川区の地域診断学習会を開催しましたのでご報告します。

2018年3月に行われたJ-HPHスプリングセミナーの地域診断に参加させていただき、大変感化されたこともあり、西淀川区の地域診断学習会を開催するぞ！という熱い思いを胸に秘め、今回の開催が実現しました。

地域診断学習会をすることで、地域のニーズや課題を共有でき、地域の社会資源を知り、その活用方法を学び、何よりも顔の見える関係づくりの第一歩としたいという熱い思いをもちながら、半年前多職種からなるコアメンバーを招集し、月1回のコアメンバー会議を重ね、既存の～よん地域包括ケアシステム

委員会にも協力していただき、充実したメンバーで準備することができました。

当日の参加者は当法人や友の会メンバーだけでなく、西淀川区の健康増進に寄与する施設（西淀川区保健福祉センター、社会福祉協議会、障害者基幹相談支援センター、地域包括支援センター、消防署、医師会、薬剤師会、西淀川区にある病院）から約70名が集まりました。8グループに分かれ、西淀川区に関する資料（人口動態、KDB、西淀川区役所地域診断資料、防災マップなど）を基に専門家（保健福祉センター、消防署、地域包括支援センター）から地域の抱える問題と対策の報告を受け、①西淀川区の現状を出し合い、②グループで決めた1つの課題についての対策を出し合いました。

各班から「外国人の労働者の増加に対して5言語対応の問診票や肺結核の教育を行う」、「健診受診率が低いことに対しては、受診者へお土産を渡したり、居酒屋に健康増進パンフレットを配布する」、「独居男性の孤立に対しては、男性がいつまでも役割を持ち、いきいきとすごすることができる場を提供する」、「区民の健康増進に対しては、喫煙・飲酒に関する知識の普及キャンペーンや路上喫煙禁止ルールの徹底」と様々な意見を出し合い、また具体的な対策を講じてくれました。

参加者から寄せられた感想には、「多くの新しい発見があった」、「多職種連携のためにもこのような会を継続していくことが大切だと思う」などの意見が寄せられました。参加満足度として参加してよかったと8割の参加者が答えてくださり、第一回としては成功に終わったかと自負しております。地域を健康にするための具体的な対策を講じていくために、第1回で出た問題からテーマを絞り、来年度に第2回地域診断学習会を開催したいと考えています。



株式会社福岡保健企画 ちどり薬局

毎日午前10時半から11時に職員1名を待合室に配置し、健康増進に寄与する多種多様な活動を展開中です。イベントとしてではなく、業務の一環として日常的に取り組んでいます。活動の一例を紹介すると、

- ①「骨密度測定 &もの忘れチェックテスト」「インボディ測定」「血流測定」「お肌の水分チェック」などの、測定をして受診勧奨や健康のアドバイスなどを行う活動
- ②「頭の体操、クイズで楽しく!」「新聞紙で作った棒を使った健康体操」「椅子に座ったままできるストレッチ」「頭の体操、脳トレパズル」「ロコモチェック」などの、頭や体の簡単な体操などを行う活動
- ③「減塩アイデアCooking（レシピ紹介）」「日頃口にしている食品の塩分量について」「食品に含まれる砂糖の量を実際目で見てみませんか?」「健康相談窓口」「サプリメントの正しい使い方（健康講座）」「知っていますか? マスクの正しい着け方（健康講座）」「便秘について（健康講座）」「ノロウイルスの対処法（健康講座）」などの、アイデアあふれる健康講座
- ④「黒豆茶について（試飲会と説明）」など事務職でも実施できる活動があります。

薬局は今、門前からかかりつけ、対物から対人へと大きなシフトを迫られています。HPHの活動は国が求める調剤薬局の在り方にリンクする部分が大きく、この活動が地域の薬局としての特色を出すことにつながっています。

また、バックヤードでの仕事がメインの薬剤師が待合室に出て、処方箋というツールがない状況で情報を発信することは、個人のコミュニケーション能力の向上に大いに役立っています。



これらの活動は薬局に来られた患者さまからの評判もよく、取り組みを始めた頃と比較すると職員のモチベーションもかなり上がりました。薬局が「町のたまり場」として地域の健康増進活動の拠点となるべく、今後もHPHの活動を継続していきます。

社会医療法人 親仁会 米の山病院

社会医療法人親仁会米の山病院は1963年に「働くものの医療機関」として、当時、国の基幹産業であった石炭の街大牟田に開設されました。開設当時から地域との関りを大切にし、各種団体と協力し合って、老人健診や公害健診、被爆者健診に積極的に関わってきました。大牟田市も他の炭鉱都市同様、1997年にこれまで200年続いた三池炭鉱が閉山になり、人口減少が続いていますが、より一層地域との繋がりを大切にし、「高齢者にやさしい街づくり」を目指しています。

米の山病院では、2016年7月にHPH推進委員会を立ち上げ、①禁煙について、②腰痛対策、③がん対策の3本柱を掲げ活動し、2017年11月にJ-HPHに加盟することができました。①禁煙については、職員の喫煙率調査を行い、喫煙率減少を数値目標で掲げました。また、院内に禁煙対策チームを立ち上げ、禁煙を促すのぼり旗を刷新し定期的な禁煙パトロールとゴミ拾い（敷地内外の吸い殻）を行いました。5月31日は世界禁煙デーにちなんで職員・患者さん向けの早朝ビラ配布等も行いました。②腰痛対策では、まず職員の腰痛アンケートを実施、対策として患者さんのベッド移乗時等にスライディングシート・ボードの使用推奨を行い、今後効果のアンケートを定期的に行い腰痛対策に取り組みたいと思います。ノーリフトコーディネーター養成にも積極的に参加し、患者さんを介護する家族や職員に少しでも負担の少ない介護ができるようアドバイスしていきたいと思います。③がん対策では、「地域・職員から進行がんを出さない」をモットーに初期のがんを見つけることが困難な中、MRIを用いた全身スキャンを健康増進課で開始しました。その他にも、2016年11月から市社協や友の会会員さんの協力もあり、月1回の子ども食堂を続けています。これまでの2年間で延べ2,741名の子どもたちが参加し、今では地域の小学校の半分の児童が参加しています（2018年第3回J-HPHスプリングセミナーにて報告）。

今年5月には地域の方・友の会の方・当院職員が参加しての「第1回終活シンポジウム」も開催予定です。HPHの活動としてはまだまだですが、「高齢者に一番優しい地域・病院づくり」を目指していきたいと思います。



加盟事業所数・新規加盟事業所

加盟事業所数 107

2019年5月3日現在

内訳：病院 62・クリニック 14・薬局 12・ヘルスサービスと研究機関 19（うち、準会員 2 事業所）

新規加盟事業所

京 都・京都大学大学院 医学研究科
社会健康医学系専攻(準会員)

岐 阜・一般社団法人ファルマネットぎふ
しいのみセンター薬局

広 島・広島中央保健生活協同組合 福島生協病院

岩 手・盛岡医療生活協同組合 さわかクリニック

岩 手・盛岡医療生活協同組合 川久保病院

鹿児島・鹿児島医療生活協同組合
総合病院鹿児島生協病院

岐 阜・医療法人岐阜勤労者医療協会 みどり病院

北海道・医療法人道南勤労者医療協会
道南勤医協函館稜北病院

長 野・長野県厚生農業協同組合連合会 下伊那厚生病院

大 阪・医療生協かわち野生活協同組合

鳥 取・鳥取医療生活協同組合 鳥取生協病院

日本 HPH ネットワーク TOPICS

第4回 J-HPH カンファレンス 2019

日本 HPH ネットワークでは、この間のカンファレンス、スプリングセミナーにおいて、カナダ家庭医の SDH に関する取り組み、貧困治療の実践とアドボカシー、SDH の臨床研究を学んできました。今回のカンファレンスでは、病院や医療団体といった組織の視点から、SDH 改善の実践とアドボカシーを広げるために必要な課題について学ぶことをテーマにしました。

具体的には、医療機関における「公正な医療」を医療の質として位置づけたカナダの実践について学びます。カナダで、医療の質を推進するオピニオンリーダーであり、かつ、ノースヨーク総合病院の院長でもあるテッパー先生を招き公正な医療の質について深く学ぶ機会になるように準備をすすめています。また、ヘルスプロモーションの研究と実践を報告するポスターセッションとワークショップ、教育講演を開催します。多くの皆さんの参加を期待しています。



Dr. Joshua Tepper

日時：2019年11月9日（土）午後～10日（日）

会場：東京・TOC 有明 4 階

基調講演：Dr. Joshua Tepper ジョシュア・テッパー氏
(ノースヨーク総合病院 CEO・院長、CEO of Health Quality Ontario, CANADA)

* 同時通訳あり

* 詳細が決まり次第、ウェブサイトに掲載します。

<https://www.hphnet.jp>

